

04・レイラ様とあまあま添い寝

『03・レイラ様とはじめての添い寝』から約一か月後。

主人公とレイラ同居が始まってからしばらくたったある夜。
二十四時近く。

主人公とレイラは、この一か月ですっかり仲良くなった。

今では夜中、主人公がレイラの部屋を尋ねる事も珍しくないほどである。
今日もまた、そんな夜の一つだ。

主人公は、まだ少しレイラに遠慮しつつも、かなり心を許すようになっていた。
そしてそれはまた、レイラも同じであった。

主人公、レイラの部屋に向かって歩いて行く。

すると、扉が少し開いていた。

主人公の気持ちは、レイラにはすでにお見通しのようなのである。
主人公、それを気恥ずかしく思いつつ、レイラに会いに行く。

SE1 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

「【穏やかに、優しく。】

すっかり慣れた様子で。

主人公の存在に気づいたので、声をかける。

トラック03とは、主人公との関係が大きく変わっている】

おお。君か。

また眠れないのか？」

〈主人公〉

「……はい……。あの、今日も……いいですか？」

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

「【穏やかに優しく。】

『もちろんだ』という感じで
うん。いいぞ。

【特に、とても優しく】
おいで」

主人公、とことことレイラのベッドまで歩いて行く。

それを見るレイラは、なんだかちよつとにやにやと、嬉しそうにしている。
レイラは、主人公が自分に頼ってくれる事が、とにかく誇らしいのである。

SE2 主人公の足音2

【最初から最後まで流す】

SE3 主人公がベッドに入る音

【最初から最後まで流す】

「【優しくからかう。

すっかり主人公と親しくなっている】

なんだ。今日はどうした？

「冗談っぽく。」

レイラは、今、主人公が何やら落ち込んでいるらしい事を察している。

だが、あまり真面目に『何かあったのか』と聞くと、かえって重々しい空気になるような気がする。

なので、できるだけ深刻な雰囲気にならないように、軽い感じで質問している」
学校で何かやらかしたか。

それとも、これからの事について悩んでいる？」

〈主人公〉

「……なんで、わかっちゃうんですか？」

主人公、ちよつとむくれてたずねる。

レイラは自分の事を『人の気持ちを読むのが苦手だ』と言い、とにかくそれを気にしているが……。少なくとも、主人公との関係には、それはあてはまらない。

もしかすると、主人公がよっぽどわかりやすいだけなのかもしれないが……。

「優しく笑う。余裕がある。」

主人公と親しくなり『自分達は仲良くなった』という自信がついてきたので」

はは。そりやそうさ。

『鈍い』と『観察眼に欠ける』は、以前仲間に言われた事について言っている。

やはり、とても気にしているのだ」

常日頃鈍いだの、観察眼に欠けるなどと言われている私でも、君の事なら自信がある。

【少し得意げに】

何と言ったって、もう一か月も一緒に暮らしているんだからな。

私もだんだん、君という人間への理解を深めているという訳だ」

〈主人公〉

「……なるほど……」

そう言われると、納得できるような気もしてくる。

だがそれは、レイラがそれだけ、主人公に注目し続けてくれた証拠でもあるだろう。つまりそれだけ、レイラは主人公との関係に心を割き続けてくれているという事だ。

「【少し得意げに。】

ここから、主人公の性格について述べていく」

たとえば、こんな事がわかるぞ。

端的（たんてき）に言えば、君は見た目で損をしがちなんだな」

〈主人公〉

「……ええっ？」

主人公、いきなりこのような指摘をされ、どきっとする。
思い当たる節が、ありすぎるほどにあるからだ。

「【少し得意げに。

ここから、主人公の性格について述べていく】
そう。

君はいかにも聡明だ。

問題なんてまず起こさなそうだし、周りからも『手がかからない』『この子ならきつと大丈夫だ』と放っておかれがちだ」

〈主人公〉

「……！」

主人公、思わず息をのむ。

全くその通りだ。

主人公には、昔からそのような傾向があるのだ。

主人公としてはまったくよくわからないのだが……レイラが今言った通り、主人公は周囲から『ちゃんとしてそう』と思われる事が多いのである。

そういえば、レイラも当初は、主人公をそのように捉えていたように思う。

だが、それが変わったという事は……やはりレイラは、それだけ主人公を見てくれているという事になる。

「【ここで、少し真面目なトーンになる。】

ここから※マークのセリフ終わりまで、段々とても優しい口調になって行く。

『自分は、主人公が抱えている淋しさを理解しているよ』という事を伝えたい』
だが……実はそんなにしっかりとっていない。

おまけに、かなりの淋しがり屋だ。

なのに、なかなかそれを理解されず、今まで色々苦勞してきたんだろうと、今はわかるよ。

だから……こんな時は、どうするんだ？」※

〈主人公〉

「……レイラさんに、頼る？」

だから主人公も、今日は素直に頼る事にした。
おずおずと、おっかなびつくり。それでもはつきりとそう口にして、レイラの事を見た。
すると、レイラがとても嬉しそうな顔をする。

「【少し得意げに。

半ば『言わせた』感があるとはいえ、主人公がそう言ってくれて、とても嬉しいので】
そう！ 私に頼るんだ。

【とても優しく。

主人公を安心させたいので】
さあ。話してみろ」

〈主人公〉

「実はですね……。特に何かあった訳ではないんですが……」

主人公、自分の指先同士をくつつけて、もじもじと、だが、少しずつ話し始める。

今主人公が抱えている悩みは実に漠然としていて、とりとめもなく、相談するには、なんだか申し訳なくなるようなものだ。

だがその一方で、誰かに話したい悩みでもあった。

ぼんやりとしすぎていて、自分ひとりでは、とても解決できそうもなくなっていたからだ。

「優しく、ゆっくりと相槌を打つ」

……ふむ」

〈主人公〉

「漠然と、悩んでしまつて。

こちらに来て一か月。

今のわたしは、この生活にも慣れ、将来よい騎士になれるよう、自分なりに努力しているつもりです。

でも『それだけでいいのかな。本当は何か足りていない部分があるんじゃないのかな』って思う事があるんです。

その『何か足りない部分』が具体的に何なのかはわかりません。ただ『足りていない気がする』という気持ちだけが強くあるんです」

「少し真面目な感じで相槌を打つ」

ほう……」

〈主人公〉

「そう思い始めると『足りない部分』について考える時間が長くなってしまつて。そうすると、いくらでも思いついてしまうんです」

「『なにつ。そうなのか。私はそうは思っていないが』という感じで相槌を打つ」
……むっ」

〈主人公〉

「多分これは、ここに来た頃には感じなかった悩みなんです。

あの頃は、新しい生活に慣れるのに必死で。

そんな事を考えている余裕はありませんでしたし……『足りないのは当たり前だ』『だって、始めたばかりなんだから』と思う事ができましたから。

……でも、今のわたしは違います。

レイラさんや騎士団の皆さん、学校の先生。

色んな方にご指導いただいて、面倒を見ていただいている立場です。だから、その恩に報いなくてはならない。

皆さんが喜んでくれるような、立派な成果を上げなくちゃいけない。そう思っているんですが……。

その理想には程遠いような気がして。

『このままじゃいけない気がする』って。

危機感みたいなものだけが、毎日強くなるんです」

「【納得した様子で相槌を打つ。

主人公の気持ちは、とても理解できるので】

そういう事か……」

〈主人公〉

「はい。ほんと、漠然としてて。

聞いていただくのも申し訳ない位なんですが……」

言うと、レイラが『そんな事はない』と言うように、小さく首を振る。それから、ゆっくりと話し始める。

「少し間をあけてから。」

とても優しく」

うん。君の気持ちはよくわかった。

確かにそうだな。

今の暮らしに慣れてきたからこそ、気づいてしまう悩みというのもあるな。

「しみじみと相槌を打つ。」

だが、主人公のこの悩みに対してよい答えが見つからないので、少し悩んでしまう」

そうか……。

そうだなあ……。」

だが、やはりこれはレイラにとっても難問であったようだ。

レイラはすっかり困ってしまつて、考え込んでいる。

だから、主人公が『やはり話すべきではなかった。レイラさんを困らせてしまった』と後悔し始めていると……。

ふと、こんな言葉が発せられた。

「【考えて、ようやく思いつく。】

あえてこれまでの日々を振り返る事で、主人公に、自分の成長を実感してもらおうとする」

では、今日は、この一ヶ月の歩みを振り返ってみるのはどうだ」

〈主人公〉

「えっ？」

だから主人公は、レイラの言葉にきょとんと顔をあげる。
それは、いつかの提案とは正反対のものだったからだ。

「【とても優しく。

ここから※マークまで、

この一ヶ月の主人公について述べていく】

約一か月前、君はこの家で新しい暮らしを始めた。
慣れない事だらけだったろう。

不満に思う事や残念な事。

思うようにいかなかった事もあったはずだ。

だが、最終的には、どれもきちんと乗り越えた」※

〈主人公〉

「！」

「とても優しく。

ここから※マークまで、

『自信を持って』『今私が言った事は、主人公本人もよくわかっているだろう？』という
感じで」

そんな君なら。

仮にまだ問題が残されていたとしても。

今後、これまでにない苦しみに直面したとしても。

きっと大丈夫だと、私は確信しているよ。

なぜなら、君はとてもよい子だし、考える力がある」

レイラの言葉が、主人公の心にしみわたって行く。

なんだか、また泣いてしまいうさだ。

こんな至らない自分を、こんなにも評価してくれる人がいる。

そう思うだけで、なんだか申し訳なくもあり『買いかぶりすぎだ』と言いたくもなり…

…だけどそれ以上に『その期待に応えたい』『その言葉を現実になりたい』という気持ちが強くなっていくからだ。

「【少し得意げに。

『主人公には自分が居る』という事を伝えたいので」

何より私がついているからな。

この私がいる限り、君を一人で悩ませはしない。

君がいつかこの家を出ていく日があつたとしても、私は必ず、君の力になり続けると約束しよう。

「【少し真面目なトーンになって」

だから、大丈夫だ」

〈主人公〉

「レイラさん……!」

レイラが大きく頷き、主人公は、思わず胸がじーんとなって、レイラの名を呼ぶ。するとレイラが、あの日のように、背中を優しく叩いてくれた。

SE 4 レイラが主人公の背中をぽん、ぽん、と叩く音

【最初から最後まで流す】

【二回分『ぽん、ぽん』と流し終えた後、残りを次のセリフとかぶせて流す】

「【とても優しく、ゆっくりと。

ここから※マークまで、

主人公を寝かしつけるような感じで

よし、よし。

今日も話してくれてありがとうな。

おやすみ。君はいつも、とてもよくやっているよ。

たとえ君が、今の自分に満足していなかったとしても。

私は君を肯定しよう。

君は立派だ。私の自慢の部下であり、仲間だ。

だから……今日も安心して眠るといい」※

だから、主人公は心からのお礼を伝えて……また、温かくなった身体に、眠りを誘われ始めた。

〈主人公〉

「わたしこそありがとうございます……今日も話を聞いてくれて。
わたし、レイラさんが居るから、何とかやっていけています。
いつも、本当にありがとうございます」

「優しく笑いながら。」

主人公の気持ちがとても嬉しいので
うん」

そしてレイラは、そんな主人公の耳もとに近づいて、そっとささやく。
静かな、春の夜の事だった。

▲ ボイス加工あり

【左耳だけに聞こえるようにする】

【特に優しく。ささやくように。】

主人公の耳元で言っているイメージ】
おやすみ」

ここでフェードアウトして終了。